第 38 回東山再生フォーラム　開催概要

テーマ：『メキシコとジャガー信仰』

日時：令和 6 年 2 月 17 日（土）午後 1:30〜3:30
場所：東山動植物園　動物会館レクチャーホール

〇講演：『山から消えるジャガー、祭りに現れるジャガー戦士
〜人びとを惹きつけてやまないメキシコの聖獣〜』
専修大学 国際コミュニケーション学部 准教授　小林 貴徳 さん

古代メキシコで神格化されていたジャガー、現代のお祭りに登場するジャガーの踊り手、ジャガー戦士など、古代メキシコから現代までのメキシコとジャガーの関りについて講演していただきました。

【詳細】

メキシコ合衆国は、人口は約 1 億 3000 万人で世界 10 位、面積は日本の約 5 倍であり、首都メキシコシティと名古屋市は姉妹友好都市である。民族構成は、混血系が 6〜7 割、先住民系が約 2 割で、言語はスペイン語であるが先住民語も話されている。宗教はカトリックである。スペインに征服されたのが 1521 年、独立したのが 1821 年で 300 年にわたる植民地時代を経て、現代のメキシコの基盤となる近代メキシコが誕生した。国内には様々な古代遺跡があり観光向けに公開されている。

東山動物園とメキシコのチャプルペテック動物園の間で姉妹動物園提携がなされ、その際にモニュメントが寄贈された。そのモニュメントは今、新ジャガー舎の入り口に置かれている。これは、「４つの太陽の祭壇」という名称で、かつてアステカカレンダーと呼ばれていた太陽の石である。真ん中に現在の世界の太陽が描かれており、その周りに４つの過去の太陽が描かれている。その１つがジャガーの太陽であり、ジャガーが彫り込まれている。

太陽の石のジャガーの太陽の周りには、20 種類の動物や自然現象が彫り刻まれている。ワニ、風、家などであり、それぞれが 1 日で、20 日で 1 か月というカレンダーの役割を果たしていた。14 番目にジャガーが描かれており、ジャガーは自然界に存在する動物の中でも非常に重要な役割を果たしていたことがわかる。

ジャガーは、夜空の太陽、山の心臓、最高位の戦士などの異名を持っていた。古代メキシコでは、ジャガーは神格として表現されていた。とりわけ重要な神であったテスカトリポカは、「煙を吐く鏡」という名前で、古い文書にはジャガーの衣をまとった姿で記されており、天空の神であると同時に大地の神であり、生命の神であると同時に戦いの神でもあった。闇夜に、斑点模様が溶け込むジャガーの体のように夜空の太陽と言う属性を持ち、密林で獲物を狙うジャガーの鼓動のように山の心臓と表されている。

古代メキシコでは、世界は、昼と夜、光と闇、太陽と雨、戦争と農耕、生と死などのように２つの部分によって成り立っていた。これらは対立した概念ではなく、互いに補完しあっていると考えられていた。雨季には農耕を行い、乾季には戦争を行うというのが１年のサイクルであった。戦争では殺戮をするのではなく、相手の戦士をとらえ神への生贄とした。多くの戦士を捕獲したものは、ワシの戦士、ジャガーの戦士などと呼ばれる最高位の戦士となった。文字通り、ワシの衣装やジャガーの毛皮をまとい、木の棒に黒曜石をはめ込んだ武器で相手を殴って戦っていた。

アステカ王のもとには多くの貢物があり、ジャガーの毛皮や美しい鳥の羽、ヒスイなどが奉納されていたと記されている。ジャガーの毛皮は、アステカ王の頭飾りやジャガー戦士の衣装や盾にも使われていた。スペイン兵との戦いでもジャガーの衣装をまとったジャガー戦士が描かれている。別の文書では、村と村を結ぶ幹線道路がジャガーの衣で書かれていたり、家系図にはジャガーに乗った形で人が書かれており、ジャガーが政治権力の象徴として使われてきたことがわかる。

私が 20 年間研究してきたメキシコ、ゲレーロ州は太平洋に面した沿岸部と山岳部で構成されており、州章にはジャガー戦士が描かれている。紀元前 900 年くらいの遺物も多くあり、歴史の中にジャガーを強く感じ取れる場所である。洞窟の壁画にはジャガーが描かれている。その壁画はジャガーと人間の結合を表しているとか、神官にジャガーの力が憑依した様子とも言われ、何らかの宗教職能者の力を表現したのではないかと考えられている。ほかにも、王の交代式において、人間が生贄とされ、ジャガーが丸呑みしたことが記されている。やはり、ジャガーが権力と結びついた動物として扱われてきたことがわかる。ちなみに、現地ではジャガーを「人を喰うもの」という意味で呼んだりもされている。

このように、よく登場してきたジャガーだが、植民地時代に入るとその登場は非常に少なくなる。この時代に建設された教会の中には、雨樋にジャガーが置かれているものがある。これは当時、教会建築の労働者となっていた先住民が、自分たちの世界観を建築に反映されたものと考えられている。このような事例はあるが、植民地時代になってジャガーというものはあまり現れなくなった。

現代の話に移っていく。ゲレーロ州の山岳部は、言語の異なる先住民の村が多くあり、民族的な多様性が際立っている地域である。伝統的なお祭りには、先住民の世界観がしっかりと反映されたものが見て取れる。お祭りで踊られる踊りの１つを紹介する。踊りの簡単なストーリーは、村に現れたジャガーが村人にいたずらをし、猟師がジャガーを捕まえに行くがジャガーが軽快に逃げ、最終的に捕まえられて埋葬されるというものだ。この踊りは非常に人気がある。特にジャガーの仮面をかぶったジャガーの踊り手が登場する際に非常に盛り上がる。いたずらの踊りをする際に少し性的な表現をし、観客を驚かせるとともに笑わせる、緊張と緩和という両方を表す存在となっている。いくつかの地域にも似たような踊りがある。その中には、ジャガーが最終的に教会の上でガッツポーズをするというものがある。これらは日常ではありえない逆さまの世界を意味しており、日常の規範をひっくり返すようなトリックスターのような役割がジャガーに与えられていると思われる。

次に、ジャガー戦士についての話。メキシコでは、１年は雨季と乾季にわかれていて、トウモロコシの栽培に関係している。雨季が始まる頃に種を撒いて、雨期の終わる頃に収穫をする。こ

の農作業のリズムに合わせてお祭りが行われている。雨季が始まる頃に行われる雨乞いの農耕儀礼を紹介する。村から聖なる山の頂上へ十字架を持っていき、儀礼を行う。その農耕儀礼の中でジャガー戦士の戦いが行われている。ジャガー戦士はジャガーの仮面をかぶり、固く縛った荒縄で１対１で殴り合って戦い、血を流す。ジャガーの仮面の目には鏡がはめられており、「煙を吐く鏡」という名前の神、テスカトリポカの化身を表していると言われている。つまり、神の化身であるジャガー戦士が流す血は、まさに自己犠牲の血である。ジャガー戦士の血が流れれば流れるほど雨が降る。叫び声は雨雲を呼び、血や汗によって大地は肥えるという考えである。

メキシコでは 20 世紀の末から 21 世紀の初めにかけて、先住民政策が大きく変わった。憲法を改正し、他民族国家で複数の文化で構成されていることを言っている。つまり、先住民の言語や文化は、国の文化的多様性を代表するということを国政として言っている。こうしたことから先住民の文化に対する伝統性や神聖さというものの評価しようという動きが 21 世紀の最初 10 年くらいでぐっと進んだ。その中で一つ取り上げられたのがジャガーであった。ジャガーやジャガーの仮面、踊り手というのがメキシコらしさを象徴している、歴史や文化的多様性を代表しているとして博物館などの展示で頻繁に登場するようになった。さらに、民芸品の生産や流通においてもジャガーをモチーフにしたものが非常に増えた。街中の壁などに描かれるパブリックアートにもジャガー、ジャガー戦士が描かれるようになった。行政や一般の地域社会がこのジャガーを活用して、文化的な創作活動を行うようになっている。

ジャガーは絶滅危惧種に指定され、野生の生体そのものは姿を消していっているが、ジャガーは人々を魅了したがり、ジャガーやジャガー戦士などをモチーフにしたものは増殖しているのが現状だ。それはメキシコの人々がジャガーを欲しているからではないかと思う。

〇報告：『東山動植物園再生プランの取り組み状況について』

東山動植物園　再生整備課長　中村 成利

開園 100 周年となる令和 18 年度（2036 年度）を完成目標として取り組んでいる「東山動植物園再生プラン」の概要や施設整備状況について、昨年オープンした新トラ・オランウータン舎、新ジャガー舎の情報などを交えて報告しました。

〇報告：『ジャガーについて』

東山動植物園　飼育員　藤谷 武史

現在、東山動植物園で飼育しているジャガーのマヤ、アスカについて、日々の生活の様子や引っ越し時の出来事・苦労した事、体色遺伝の仕組みなどについて報告しました。